



Yoshikazu Tomonaga

土器屋 由紀子 さん

(どきや・ゆきこ) 1939 (昭和 14) 年、東京生まれ、関西育ち。専門は環境科学。農学博士。東大農学部卒、東大農芸化学科、気象大学校、東京農工大、江戸川大で分析化学、環境科学などの研究と教育に従事。2004年に無人化された富士山測候所の有効活用に向けて「認定 NPO 法人富士山測候所を活用する会」の立ち上げに参加、同理事を務め、富士山頂での大気観測に長年取り組んでいる。江戸川大学名誉教授。主な著書に『変わる富士山測候所』（江戸川大学土器屋由紀子ゼミ編、春風社 2004）、『気象ブックス 034 フィールドで学ぶ気象学』（共著、成山堂書店 2010）、『よみがえる富士山測候所』（共編著、成山堂書店 2012 本誌 39P）ほか

剣ヶ峰3776mの岩にしがみつくように建つ「富士山測候所」と共に 元祖リケジョ（理科系女子）の活躍 よみがえれ「富士山測候所」



富士山が世界文化遺産に決まって、日本中が沸き立っていた2013年6月、「富士山に対して日本人は独特の情緒を持つ」といわれ、世界遺産をわがごとくのように喜ぶ人も多く、常にもまして「富士山」が脚光を浴びて

気予報に不要になり、測候所は取り壊しの運命となった。

ちろん会員である。クラウドファンディングや無料で支援できるワンタリックにも参加して、支援を求めている。

その富士山の片隅にある「測候所」で、いまでも貴重な研究活動が続けられていることはあまり知られていない。「富士山測候所」（正式名「富士山特別地域気象観測所」）は、2004年に無人化（官庁用語で非常駐化）されて、バッテリーによる観測だけになり、有人観測72年の歴史に幕を下ろした。72年の間は、冬期は遭難の危険を冒して気象庁の職員が3週間交代で通勤していた。新田次郎が中央気象台（現・気象庁）の交代勤務員として冬の富士山頂で過ごした経験をもとに『強力伝』『芙蓉の人』『富士山頂』などを執筆、映画化などの舞台となった。ところが、気象衛星が普及し、世界一を誇った富士山気象レーダーも天

測候所は天気予報にしか役立たないのか？

3・11フクイチからの放射線を測定

土器屋氏ら研究者は、彼らにとって唯一無二の研究の場だった測候所の取りつぶしを防ぐために、この施設を国から借り受け研究と教育の拠点にしようとして立ち上がり、2006年にNPO法人として認証された。

いまは、大気化学や物理学の研究の数々が行われている。オゾンや二酸化炭素、宇宙線や雲や雷、永久凍土と植物生態、そして、高所医学では「登山時の身体ストレスの解明とその有効活用」が行われている。

宇宙線（自然放射線）の測定と航空機内の被ばく研究に取り組む研究者たちは、福島原発事故後に登山道で空間線量率が毎時0.033~0.054 Svと測定、微量ながらセシウムからのガンマ線も検出、福島原発由来の放射線物質を確認した。放射能汚染の貴重なデータが観測できたのは測候所を維持してきた成果のひとつだ。

だが、会員の会費と寄付で成り立っている活動は、常に厳しい財政難に見舞われている。土器屋氏らは手分けして、専門分野の研究を、民間の助成団体の研究費助成金に応募して、測候所の維持と観測を続けている。労山も

氏も、理系大学をめざしたのとは自立のため。当時の「飢えないための科学技術立国」というスローガンそのままだ。しかし、いま「科学技術の負の側面」に目を向けなければならぬと、「科学技術者の一角」からいろんなメディアで発言を続けている。

（本誌／桑村昌子）

一を誇った富士山気象レーダーも天

の維持と観測を続けている。労山も